

空き家を活用した都市空間形成による住民間のセーフティ ネット構築

富永京子

所属： 立命館大学 産業社会学部

概要

本研究は、若者と高齢者が抱える就労不安や孤立といった課題に対し、都市に存在する空き家・空き店舗を活用したコミュニティ形成が、世代間のセーフティーネットとなり得る可能性を分析するものである。1970年代以降の「スクウォッティング」や日本の事例を背景に、札幌市と川西市の事例を対象に質的調査を実施した。調査では、空間配置や動線設計など非言語的な「空間による自治」が注目され、特に精神的困難やDV被害者などの安全と社会的共生を同時に実現しようとする試みが見られた。今後の展望として、「安全」と「共生」という一見矛盾する課題を両立させる支援のあり方を探ることが重要であると考えた。

abstract

This study explores the potential of urban communities that repurpose vacant houses and storefronts as intergenerational safety nets in response to increasing youth employment instability and elderly isolation in post-COVID Japan. Drawing on cases in Sapporo and Kawanishi, the research uses qualitative methods to investigate how such communities—often led by youth—create spaces that also serve and connect elderly residents. Particularly noteworthy is the concept of “spatial governance,” where non-verbal elements such as furniture layout and movement flow are designed to ensure comfort and autonomy for vulnerable individuals, including people with mental health issues and domestic

violence survivors. The study highlights the challenge and necessity of balancing “safety” and “coexistence” in community-based care without relying solely on professionals.

研究内容

背景

近年のコロナ禍を経て、若者の不安定就労、貧困といった問題はより顕著となっており、一方、自治会や町内会が現象の一途を辿り助け合いの基盤を失いつつある日本社会は、とくに高齢者に対して孤立や幸福感の低減という重い課題を残している。本研究は、若者と高齢者双方を包摂するセーフティーネットとしての都市コミュニティの可能性を考えるために、若年層の空き家・空き店舗を労働拠点とした都市コミュニティ形成による、地域住民である高齢者の孤立感・幸福感への影響を分析する。

1970年代以降「スクウォッティング」と呼ばれる形で、意欲のある市民が空き家を自主的に活用し、社会的少数者の支援センターや高齢者、貧困層向け住居を運営するという社会貢献活動・相互扶助活動がよく見られる（Owens 2009）。日本では、例えば東京・高円寺や大阪・釜ヶ崎、京都・西陣などで地域住民から空き家や空き店舗を引き継ぎ、DIYでのリノベーションを施した後に雑貨屋やリサイクルショップ、カフェ・食堂といった形で運営したり、住居として再活用する事例が多く見られる（松本 2016 など）。

こうした活動に従事する人々の多くは20-30代の若者であり、日本の先行研究はこうした活動の「若者文化」や「趣味」的側面を強調していたが（毛利 2011）、これらの都市コミュニティは若者が稼得するための生業の場であるが、一方で地域に居住し、古くからの地域住民や高齢者から新たな空き家や空き店舗を譲り受け、高齢者向けの食料配達や便利屋などの機能も担う地域の交流拠点としての役割を担う（えらいてんちょう 2018）。このような空き家・空き店舗の再利用は、都市における余剰資源の活用となると同時に、若年自営業者には自律的で主体的な働き方が可能であり、高齢者にとっては顔の見える範囲での世代を超えた交流や共助が可能なセーフティーネットでもある。本研究は、従来型の雇用労働に適応しづらいことに不安を感じる若年層の割合が極めて高く、また長寿高齢化の一方で孤立による将来不安が強い高齢者層が多く、何よりも「共助」に対する意識が失われている日本社会（NHK放送文化研究所 2021；田中 2021）の課題を考える上で、重要な

示唆を持つ。

目的

先行研究として、海外の社会学・地理学による「共助コミュニティ」研究がある。これらは、市民が自律的に形成した職業紹介所や簡易診療所、高齢者・障害者のケア施設などのソーシャル・センターを営みつつともに住まう欧州・南米の事例を数多く検討したが、対象となる国の多くは共助やコミュニティ活動への意識が高い国々である(Heinonen 2019, Kurnicki 2014 など)。本研究は相互扶助に乏しく、さまざまな中間集団が衰退の一途を辿る日本で、地域の空き家・空き施設を活用した都市コミュニティによる世代間セーフティーネットの形成がいかんにして可能になったのかを明らかにすることで、先行研究に貢献することを試みた。

方法

本研究は欧州の社会学・地理学における都市社会学・社会運動論を中心に発展してきたコミュニティ形成研究の知見を発展・拡大させるため、北海道札幌市、兵庫県川西市の空き家・空き店舗を活用した都市コミュニティを分析する。同様のコミュニティは東京（池袋、高円寺、吉祥寺）・大阪（天満）・札幌・福岡・兵庫・京都等の大都市に存在するが、川西市・札幌市の事例は、空き家・空き店舗利用の試みが見られる地域としては、子育て世帯や高齢者など多様な居住者層が見られ、高齢者と若年層に限らず多様な年齢層の人々を包摂するセーフティーネットとしての成果や課題が観測されやすいと考えたためである。

北海道札幌市のスペースは、生活困難な状態にある人々のセーフハウス兼シェルターであり、兵庫県川西市のスペースは空き店舗を活用した重軽飲食業とコミュニティハウジング、シェルターである。研究方法として、聞き取り調査を主とした質的調査研究を行った。

その結果として興味深かった点に、言語的なコミュニケーションではなくもっぱら「空間形成」をもって自治を行っている点である。例えば、視線恐怖、パニック障害などの疾患を持つ人々に対して、なるべく混乱しないような動線形成や他者の視線が一点に集まらないような家具の配置を重要視するといったものである。

今後の展望

本研究で対象とした都市自治コミュニティは、明文化したルールを設けず、家具の配置

や仕切りといった空間形成によって自治を行う点が極めて興味深い。報告者は、こうした空間形成の根底にあるのは、地域住民やマイノリティーといった多様な人々の「安全」と「共生」の空間はいかにして可能かという課題であると考えた。

とくにシェルター・セーフハウス事業において、包摂・支援の対象の少くない部分がDV被害者や社会的弱者であるため、住所等を秘匿し支援対象者を隔離することで被支援者の「安全」を担保する必要性、一方で被支援者の社会復帰や孤立緩和には他者との交流や対話といった「共生」が必要な点がある。この「安全」と「共生」は支援の負担を特定の専門職に課さず、より社会一般にケアを開いていく上でも両立すべき要素であるが、貧困へのスティグマや支援対象者の安全保護の観点から、実務上の両立が困難だというジレンマがある。本研究で対象とした両事例は、この都市コミュニティを形成・維持する上での問題に挑戦しており、また本研究もこの「安全」と「共生」を主軸として研究を行う必要があると考える。

引用文献

Heinonen, P., 2019, “Constructing autonomy,” *Social Movement Studies* 18(6).

Owens, L., 2009, *Cracking under Pressure*, Polity.

Kurnicki, K., 2014, “Towards a spatial critique of ideology,” *Journal of Architecture and Urbanism*, 38(1)

えらいてんちょう, 2018『しょぼい起業の始め方』イースト・プレス.

松本哉, 2016『世界マヌケ反乱の手引書』筑摩書房.

毛利嘉孝, 2011『ストリートの思想』NHK出版.

NHK放送文化研究所, 2021『現代日本人の意識構造』NHK出版.

田中世紀, 2021『やさしくない国ニッポンの政治経済学』講談社.

本助成に関わる成果物

[論文発表]

富永京子, 「『言葉遣い』から離れた社会運動はいかにして可能か：プロテスト・キャンプとしての高山建築学校の実践から」『現代思想』2024. 11.

富永京子, 2024, 「調査研究と協働／共同の『狭間』、活動家と研究者の『狭間』」『文化人

類学』88(4).

[口頭発表]

Kyoko Tominaga, “Housing, Working, and Networking with Neighborhoods: Constructing Autonomy and Reconstructing Community by DIY Activists”, AAG 2024 Meeting

Kyoko Tominaga, “Housing, Working, and Networking with Neighborhoods: Constructing Autonomy and Reconstructing Community by DIY Activists”, Political Geography Speciality Group Preconference

Kyoko Tominaga, “Housing, Working, and Networking with Neighborhoods: Constructing Autonomy and Reconstructing Community by Ex-Activists Youth”, The Youth and Student Movements in East and Southeast Asia workshop in Taiwan

[その他]

富永京子, 2025『社会はなぜ変わるのか』講談社現代新書. (2025年7月刊行予定)